【美濃太田駅前坪内逍遙胸像解説板】

坪内逍遙略歴

逍遙こと、坪内雄蔵(幼名・勇蔵)は安政六(一八五九)年五月二十二日、美濃国加茂郡太田村にあった尾張藩太田代官所の屋敷(現美濃加茂市立太田小学校付近)で父平右衛門(後に平之進と改む)と母ミチの子として生まれた。

幕末維新は風雲急を告げ、中山道の人馬往来のあわただしい中、父母兄姉の養育、手習いを受け成長した。明治二(一八六九)年、十一歳の時、父の隠居に伴い、名古屋へ移住。明治九(一八七六)年、愛知県の選抜生として上京、開成学校(現東京大学)に入学。

明治十六(一八八三)年、同校文学部を卒業するや東京専門学校(現早稲田大学)の講師(後に教授)となり、教鞭のかたわら『当世書生気質』『小説神髄』を著して明治維新文壇の先達となった。又、逍遙は文人にとどまらず、文芸運動を指導し、演劇、新国民劇の創造改善にも心血をそそぎ、明治三十二(一八九九)年には文学博士の学位を受け、『国語読本高等小学校用』全八巻などを刊行。かくして明治・大正・昭和の三代にわたる我が国民文化の偉大な教導者として仰がれた。晩年の逍遙は熱海の双柿舎に住み、宿願の『シェークスピヤ全集』の翻訳を完成、昭和十(一九三五)年二月二十八日、七十七才の天寿を全うした。早稲田大学葬がおこなわれ、墓は熱海の海蔵寺にある。資産はすべて寄附され、数々の偉業は早稲田大学坪内博士記念演劇博物館に納められた。

逍遙が最後にここ生誕の地を訪れたのは、大正八(一九一九)年の晩春。夫人センを伴い、木曾川の清流にたたずみ、虚空蔵堂の大椋をなでて懐旧の情にむせんだ。

郷土が生んだ偉大な人物である逍遙の偉業を顕彰するため、生誕百三十年に併せ、美濃加茂ライオンズクラブ結成三十周年記念事業として建立するものである。

一九九一年十月二十七日

美濃加茂ライオンズクラブ　寄贈